第二回長崎学公開講座 第一部発表要旨

川原慶賀筆長崎港図屏風 その謎の解明

原田 博二

長崎港図屏風は、八曲一隻（縦一七一cm、横四七〇cm）の絹本着色で、現在、ライデン国立民族学博物館に所蔵されている。

この長崎港図の製作年代であるが、画面中央のオランダ船のメインマストに大きく翻る赤い旗に、この船の船名「マライ・エン・ヒレホンダ」と書かれている。

このヒレホンダは、一八三六年に長崎港に、それも一度だけ入港していることから、この長崎港図は、一八三六年ころの長崎港を描いたものである。

しかし、鎖国時代、このように長崎港を詳細に描いた絵画類の国外持出しは、厳しく禁止されていた筈である。

小さな絵画や未表装のものであれば、荷物のなかなどに隠せば持出せたかも知れない。

しかし、この長崎港図は、屏風仕立てである。こんな大きな屏風を密かに持ち出すことなどは、まず不可能なことである。

この謎を解決するには、この長崎港図がどこで屏風に仕立てられたかを解明するのが一番の早道である。

しかし、それには屏風の下地に貼られた紙を見るしかなく、その紙に長崎のことが書いてあれば、間違いなく長崎で屏風に仕立てられたことになるのである。

京都の表具師宇佐美直治氏を通じてライデン国立民族学博物館の学芸員ダン・コック氏よりわれわれの到着を待ってこの屏風の解体作業を始めるとの連絡があった。

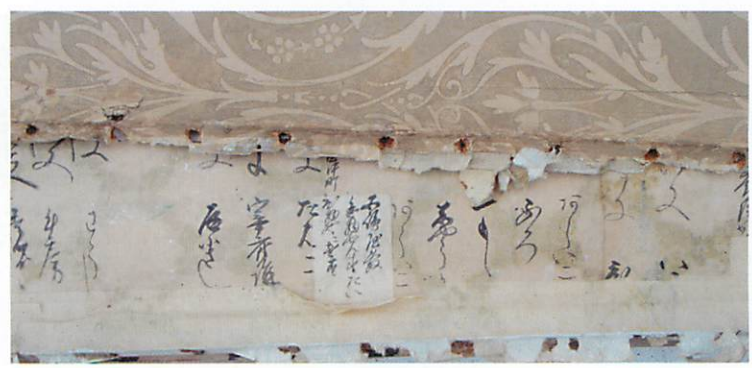
そこで、四月一五日から一九日まで作業に参加することにして、宇佐美氏と四月一四日ライデンに到着した。

この屏風には、大体、三枚の唐紙（日本製）と一枚の壁紙（ヨーロッパ製）が貼られ、その間に和紙がランダムに貼られていた。

画面（本紙）部分を剥がし、さらにその下の唐紙や和紙を剥がし始めた。和紙を剥がして行くと、まず「五嶋屋敷」と「へにさし」（紅さし。ヒメジ科の小魚）と書かれた文書（断簡）があった。

五嶋屋敷は、江戸時代、西浜町にあり、べにさしは長崎の正月料理につきものである。

やはり屏風に仕立てられたのは長崎だったかと思っていると、続いて「たわらこ」（海鼠）「もろむき（裏白）」など長崎の正月料理や正月用品が、さらに、「大黒町」、「今紺屋町」、「酒屋町」など長崎の町名や「福済寺」、「光源寺」、「水神社」など長崎の寺社名が書かれていた。



「五嶋屋敷」「へにさし」と書かれている

これらのことから、長崎港図は確かに長崎で屏風に仕立てられたことがわかったのである。

それでは、この屏風はどのようにしてオランダに運ばれたのであろうか。これがもう一つの謎なのである。

このことについて、たとえば阿蘭陀通詞や出島乙名など出島関係の役人と結託すればできないことではないとも考えられる。

しかし、文政一一年（一八二八）のシーボルト事件以後、これら禁制品の取締は厳重であったばかりか、作者の川原慶賀は役人たちからマークされていた。

現に天保一三年（一八四二）慶賀は某オランダ商館員の注文の長崎港図に長崎奉行所西役所や番船の幕に「九曜之星や茗荷等之紋所」、つまり細川家や鍋島家の家紋を描き、それを渡したのならまだしも、渡そうとして、つまりすんでの所で逮捕され、江戸、長崎の所払に処せられたのである。

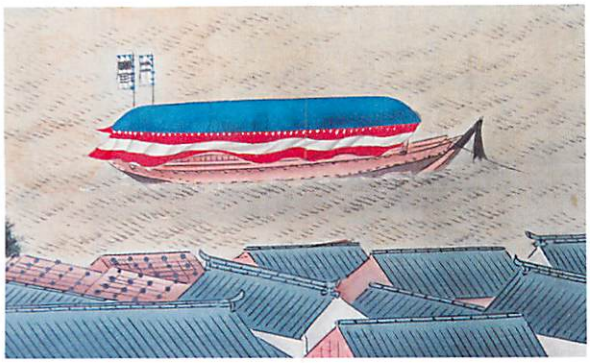
そこで、さらにこの屏風を細かく見ると、西役所は勿論、鍋島家か細川家の御座船と思われる船の幕に鍋島家や細川家の家紋が描かれていないのである。

番船や陣屋などの幕に家紋があるのは権威を示すもので、江戸時代、これ

らの幕に家紋はあって当然、ないのは却っておかしいのである。

本来は、この御座船の幕には鍋島家か細川家の家紋があった筈である。

これらのことから、慶賀がこの長崎港図を描いたのも、屏風に仕立てたのも、さらには、オランダに運ばれたのも、全て鎖国時代ではできないこと、それは安政六年（一八五九）の開国後のことで、特に慶賀がこの長崎港図を描くことについては、長崎奉行所の許可のもと行われたものと考えるのである。



御座船の幕に家紋が描かれていない。

第一回長崎学公開講座 第二部発表要旨

鼠島（ねずみ島）のこと

野田 和弘

現在ねずみ島は埋めたてられ陸続きだが、かってのこの島を最も有名にしたのが瓊浦游泳協会（後の長崎游泳協会）である。明治三五年（一九〇二）八月、東洋日の出新聞社長の鈴木天眼が協会を設立し、鼠島游泳道場を開いた。

協会の名前を一躍全国に高めたのは三度に渡る有明海横断遠泳であろう。第一回目は大正三年（一九一四）八月一五日。熊本市の小堀流踏水術稽古場からの参加案内に応え、二四名（平均一七歳、内女子二名）、指揮者四名の二八名が参加した。島原市の猛島神社前海岸から熊本県長洲港までの約二〇㎞。潮流が強く遂に断念した。熊本隊も成功しなかった。

大正五年（一九一六）八月一四日、協会は再挑戦した。参加者は男子二一名。コースは逆に長洲から島原を目指した。急速泳法で潮流を乗り切り遂に八名が横断に成功した。

昭和三十九年の横断遠泳。長洲港を目指してひたすら泳ぐ（「長崎游泳協会九十周年記念誌」より）

そして昭和三九年（一九六四）八月一九日、東京オリンピックを記念して第三回目が実施された。参加者は男性三四名（平均一七歳）、女性九名（平均一五歳）の四三名、指導陣一四名の五七名。コースは有明町大野浜から長洲まで、いったん南下し途中から上げ潮に乗って北上するV字コースを採ったので、二〇㎞を超える。台風の余波を受け、風と波との戦いであったが約九時間の苦闘の末、ついに四〇名が完泳した。

第二回長崎学公開講座 第二部発表要旨

ライデンとシーボルト

原田 博二

ライデンは、人口一〇万人くらいの町である。ライデンが歴史に登場するのは、紀元八三〇年頃のことで、現在でも市の中央部にはバーフト城と呼ばれる砦が残されている。

このバーフト城は、高さが五〇m程の人工の丘に築かれているが、ライデンはこのバーフト城を中心に発展した町であった。

現在でも旧市街はほぼ楕円形の運河で囲まれているが、この運河は、ライデンの外堀の役目を果たしていた。

ライデン大学の本部は、ライデンの南西部、旧市街の一角にある。このライデン大学は、オランダがスペインから独立を勝ち取った記念として、一五七五年にウィルレム公によって開学されたものである。

また、大学本部のなかにある植物園は、一五八七年に造られたもので、ヨーロッパ最古の植物園である。

シーボルトは、一八二九年に日本を追放されると、オランダに帰り、ライデンのラペンブルブ街一九番地の住居を借り、ここで日本の研究に没頭した。

現在、この住宅は、シーボルトハウスと呼ばれ、シーボルトのコレクションを展示する博物館となっている。

ところで、ライデン市にはデジマ（出島）通り、シーボルト通りと呼ばれる通りがあるが、ここにはかつてシーボルトの経営する会社があり、ニッポン通りもあったとのことである。

このデジマ通りとシーボルト通りは、ライデン市の正式な行政地名である。

それだけに、ライデンでは、シーボルトの功績は、現在でも高く評価されているわけである。

左奥がデジマ通り、シーボルト通り